

# くろぐみだより

第5号 平成23年12月22日 あさひこ幼稚園

あさひこ tweet…

(このくろぐみだよりを、事実と違いがないか、とチェックしてもらった星1担任)  
「リアルに思い返すすぎて苦しくなりました」  
(そりゃ、当事者ですからね…)

幼稚園には「記録」という大事な大事なものがあります。

先生たちは、個人について、活動について、まあとにかくいろいろな記録を書きます。それは、事実だけを淡々と、客観的に書きます。そして、それを元に幼児理解につとめ、発達に沿った保育の展開を考えます。

今回のくろぐみだよりは、年長の運動会について書こうと思っていたのですが、いつも先生たちが書くような客観的な記録ではなく、あえてぼくの主観的な視点で、私的な表現で、読み物として、書いてみました。たまには、幼稚園のことや、子どものこと、発達のことを、こんなふうにお伝えして、読んでいただくのも、いいかなあ、と思ひまして。

お気に召すかわかりませんが、まあ、B4で6ページ、とにかく長いので、お時間のあるときにでも、どうぞ。

## あおぐみの運動会 (副園長)

今回はあおぐみ(星1組)の運動会のことを書きます。ただ、なんであおぐみなのかといえば、今年度は、「あおぐみは足が遅いからサポートしてほしい」という理由で、ぼく(副園長)があおぐみと一緒に活動することが多かったからです。あおぐみと一緒に活動している間、くろぐみだよりをちょっと意識しつつ…自分で感じたことを書いていたので、それをもとに書きたいと思います。なので、ここに書いたことは、あおぐみだけなにか特別な?保育をした、ということではなく、それぞれのクラスがそれぞれ行っている保育の、たまたまぼくが今年度多く関わったあおぐみの、その一部分だけを切り取っただけだということです。ご了承ください。

「走る青」 9月30日 記

あおぐみは、ただ足が遅いのだ。  
今までの経験か、フィジカルの差か、とにかく遅かった。

運動会のラスト、最大のクライマックス、年長バトンタッチリレー。  
たくさんの練習、あお組はとにかく、勝てない。

最初のころ普通にリレーをして、他の2クラスと、差が3周ついた。  
同い年のリレーにしては、あまりに遅すぎる。尋常じゃなく、ただ遅い。

だけど明るい子たちだった。じゃあ練習しようよ!とあって、練習した。

走って、負けて 走って、負けて 走って、負けて  
負け続けた。ずっと3位。

朝の時間に、昼の時間に  
何人かで集まって、練習して  
だんだん速くなってきた。

それで 走って、負けて 走って、負けて 走って、負けて  
負け続けた。ずっと3位。

「1位、みずいろぐみ!」 「やったー!」「ハンザーイ!」  
「2位、ふじぐみ!」 「いえーい」  
「3位、あおぐみ!」 「…」

ずっと3位。順位発表のときは、いつも無言のあおぐみ。  
みずいろぐみとふじぐみの声が聞こえる。  
「し〜ん(笑)」 「クスクスクス…」

みんなで考えた。友達の走ってるところを見て考えた。  
腕の振り方 足の出し方  
白い線のなるべく近くを走ること バトンの渡し方  
「体育」をやってんじゃなくて、「保育」をやっている。

だから先生は教えない。自分たちで気づいて、自分たちで考えて、わからないことはユウシ先生にも聞きに来て、クラスの時間に、作戦を考えた。  
それで 走って、負けて 走って、負けて 走って、負けて  
負け続けた。ずっと3位。

順位発表、みずいろぐみとふじぐみの声が聞こえる。  
「し〜ん(笑)」 「クスクスクス…」

「そうやって言うのやめろ!!」  
あおぐみの男の子が立ち上がって叫ぶ。  
「そうやってし〜んとか、笑ったり、そういうのいやなんだよ!」  
うまく言葉になんかできない。でも。

座りながら砂を触ってたみずいろぐみの子が言う。  
「そんなん言うならさー、勝てばいいじゃん?」  
「おれたち負けたとしても、笑われたっていやじゃないし?」

なにも言い返せないあおぐみ。  
立ち上がった子の、こぶしがぎゅっと握られるのみ。

まだ、あおぐみの全員の気持ちがリレーに向いているわけじゃない。  
練習に来ない子もいる。半ば雰囲気走らされている子もいる。砂を触っている子もいる。

昨日、全員そろってグラウンドが使える練習前。  
作戦の確認をクラスで行っていたとき。  
「…Aはなんで練習来ないんだ」  
ふと、声上がる。  
「そうだ、A、おまえはなんでいつも誘っても練習来ないんだよ!」  
「…走るの、嫌いだもん。疲れるし…」  
「そんなこと言ってる場合じゃないだろ!」  
「そうだそうだ!」  
…いろいろな子に、いっきにたくさん言われて、逆に態度を硬化させるA。  
立ち上がって、地団太を踏みながらAが叫ぶ。  
「うるさい!そんなの言われたくない!リレーなんて大っ嫌いだ!みんなのことも嫌いだ!」  
真っ赤な顔のA。いつしか鼻血を出しながら叫ぶ。  
「大っ嫌いだ!!!!」

「…」 「…」  
Bちゃんが口を開く。  
「…みんなはAのこと好きだよ。一緒がんばりたいって思ってる。なのに嫌いなんで、なんでそんなこと言うの?」  
いつも元気なCちゃんが、わあっと膝を抱えて泣き出す。  
頭もよく、足も速いが、照れ屋でいつもちょっと斜に構えてるDが、立ち上がって叫ぶ。  
「みんな、話聞いてんのか!!」  
Dは、いつもAと大の仲良しだ。  
「A、そんな風に怒ってもしょうがないだろ!話し合うんだ!」

…話し合いが続く。  
思いを出し合う。やっと本音を出し合う。うまくは言葉にできない。  
でも出し合う。叫びとして、あるいは涙として。

全員が全員、そこに起こった熱の中で、頭を、心を、それぞれ精一杯使っていた。

結局その日、グラウンドには行かなかった。  
給食の時間まで、保育室の中で、話し合いが続いていた。

そして最後に、みんなで決めたこと。  
「苦手な子に、教えること」  
すごく簡単な答え。答えだけ見れば、なんと単純な。

『勝ちたい』

昨日、Eちゃんが、手足口病になった。  
ばったり会ったお母さんと話をした。  
「Eちゃん、すごくがんばってるんですよ。走るのもがんばってるし、意見もすごく言う。友達のこともすごくよく見てますよ」

「そうなんです」  
「はい、今日はあおぐみでもすごい白熱した話し合いがあって… みんな、負けてはいるけれど、すごく育ちあっています。とてもすごいです」  
「そうですか… 実は、昨日もわたし、夜に7回起きたんです。あの子が、寝ながら、急に足をばたばたさせて私を蹴るので、わたしが起きて、どうしたの、って聞くと 『…勝ちたい』 って、答えるんです」

きっと、夢の中でも走ってる。

『勝ちたい』

今日、あおぐみがグラウンドを使えた午前の時間。  
Dが、Bが、みんなが、Aに伝えていた。  
「そう、そうやって腕を振るの！」  
「白い線を守って！」

Aは、遅い。  
ただ力強く走っていた。  
青い空の下だった。

-----

あさひこ幼稚園 教育課程 第14期（抜粋）

8月23日～10月8日

発達の姿：自分のイメージをはっきり持ちながら、友だちの意見も受け止めて遊び、自分の課題に一つ一つ取り組み、達成感を積み重ねていく時期

- ・クラスや園の環境に目が向き、自分がどうしたらよいか考えて行動しようとする。
- ・自己発揮しながらも、友だちの思いを理解しようとし、目的を共にして活動しようとする。
- ・グループやクラスの活動のなかで、話し合いに参加して自分の意見を発言したり、自分の役割を果たしたりする。
- ・遊びやクラスの活動のために必要なルールや約束をみんなで作っていく。
- ・自分の遊びのイメージを広げたり、深めたりするために、いろいろな素材、材料、用具、技法を工夫して遊ぶ。
- ・チーム意識や、競争意識を持って、全力を出して集団遊びに取り組む。

-----

3周あった差は、いつしか2周となり、1周となり、今、なんとか周回遅れが出ないようになった。

他のクラスだって、満足なんてしていない、同じように課題を持って、じゅうぶん頑張っているのに！

昨日のきみたちより、今日のきみたちは、ずっと速い。  
それを毎日繰り返してきた。本番は、10月8日。  
あと、5日ある。まだ、5日ある。  
ほんとうの「勝ちたい」に、いま火がつきはじめたばかり。  
みんなで、勝ちたい。だから！

10月8日に向けて、あおぐみが走る。  
いや、ほんとうは、もっと大切なものに向かってる。

あおぐみが、走る。ただ、走る。

「Tangled up in blue」 10月3日 記

ぼくは石を拾っている。トラックを裸足で走ることが痛くないように、怪我をしないように。毎日石を拾っている。

午前中、いわゆる自由保育の時間に、年長3クラスがリレーの練習で勝負をしていた。何度もやる。遅く登園してくる子は揃ってないし、人数あわせでひとりが何度も走ったりする。しょせん練習試合だ。

あるとき、みずいろぐみとふじぐみが何度もバトンを落とした。あおぐみはその回、バトンワークが完璧だった。  
ギリギリだったが、その回、あおぐみが1位になった。  
すごい喜び、大きなバンザイ！！

その後は、またずっと3位だった。  
まだ、「まぐれ」の域を出ない勝ち方。  
バトンもミスるし、自分の番なのにトラックに出ていないなんて失敗までした。気持ちが入っていなかった。

その後、先生がクラスで珍しく少し感情を出した。  
（ぼくは、邪魔しないように、クラスのベランダ側でしゃがみ、隠れて話を聞いていた）  
「そんな気持ちなら、走らなくていいよ！」

みんな真剣な顔で聞いていた。  
今から、全員揃って、幼稚園から少し離れた花園グラウンドに行って、3クラスで正式な勝負をする。

その前に、みんなで作戦を確かめ合い、今日がんばるところを話し合う。走順も話し合って決める。

Dは、「アンカーがやりたい」と言うが、みんなに「おまえは速いけど、砂触ったり、がんばる気持ちが足りない！」と言われ、アンカーにさせてもらえない。

じゃあ、がんばる姿を見せる！とDは言い、誓った。  
他のみんなも、今日は全力で、真剣にやるぞ、と。

練習試合。あおぐみは、クラスを半分に分けた赤白2チームとも、3位。それはいい。  
終わったあと。

「じゃあ、ユウシ先生から話を聞きます」  
おやまずわりで座っている3クラスの前で話をする。  
「…みんな、速くなったね。どこのクラスも。  
予行練習のとき、一週間前、その前、そんなときとぜんぜん違うよ。  
腕も、足も、ぜんぜん違う。  
とってもがんばってるね。  
なんでみんなはがんばってるの？」

「勝ちたいから！」  
「勝ちたいっていうのは、2位でもいい？」  
「いや、1位！」  
「そう。みんなそうなんだね。どのクラスも。どのクラスもがんばってるから、なかなか思い通りにいかないね。がんばっても、なかなか1位になれないね。みんなが、全部の力を出してがんばらないと、1位にはなれない」  
「うん！」

みずいろぐみも、ふじぐみも、もちろんあおぐみもだ。  
「でも先生は思ったよ。まだみんなは全部の力を出しきってない。全部の力を出しきってないから、今日2位や3位だったチームは、1位にはなれない。1位だったクラスは、次も勝てるとは思えない。

なんで全部の力を出しきってないってわかるかっていうと、今もわかるよ。先生がいまみんなのことを考えて話してるときも、砂触ったり草抜いたりしてる子がいるもんね。

本当に勝ちたいって思ってるみんなは、なんで入場するときや、チームの交代の移動のとき、笑いながらおしゃべりしてるの？ともだちが走ってる時、砂を触ってたり、友達を見てない子がいるの？だから今日、バトンのミスをしたり、自分の出番なのにでてなかった子がいたよね。見てないんだもん。気持ちがどっかに行っちゃってる。それで勝てるの？」

「…」

「入場のと時から、勝つぞ！って思ってる子は、見ててわかるよ。顔を見れば、目を見ればわかる。『作戦はこうだ！』『今日はおれはここをがんばる！』って思ってるの、わかるよ。ともだちを応援する姿、大きな声でアドバイスする姿を見れば、わかるよ。

今日は、そうじゃなかった子がいたね。だから、全部の力を出してない。だから、勝てない」

珍しく、熱っぽく、たくさん話してしまう。

「今も。わかる。先生とみんなの目があったとき、伝わってくるよ。ひとりひとりから伝わってくるよ。

先生は、全部の力を出したみんなが、みたいです。…お話、おわります」

クラスに帰って、あおぐみ。

(またベランダで盗み聞きをする)

先生が感情をこめて、言った。

あまりはっきりは聞こえなかったが、おおよそんなことを。

「Dくんは今日、みんなにほんとのがんばる姿を見せるんだよね？

見せたの？ みんなは？ 今日のみんなはどうだったの？

みんなはほんとうにがんばれたの？

…

もういいよ。もうやめよう。

そんなふうならリレーやたってしょうがない。

あおぐみはリレーをやめるって、園長先生に言おう。

先生は、バトンを園長先生に返してくる！」

「いやだ！」とBの声。

続いてたくさんの子の叫ぶ「いやだよ！」の声。

部屋中から起こる「いやだ」と、泣き声。泣き叫ぶ声。

先生は、保育室を出て行ってしまった。

さあ、どうするのだろう、と、聞いていた。

大泣きの中、すこしずつ声が上がります。

「どうすればいいのー！」 「先生ー！」

そんな経験は、この子たちにとっても、先生にとっても、初めてのことだ。

どうしたらいいのかなんて、いま答えを知っている者は、誰もいない。

少し落ち着いたころ、クラスのリーダー格の子から声が上がります。

「とにかくみんなキッチンと座って先生を待つんだ！みんな座れ！」

ぼくは、先生のことも気になったので、職員室に行く。

先生は、どうしよう、と主任先生に相談している。

とにかく様子を見ましよう、と、奥の部屋に隠れる。

数分後。

部屋を少し覗くと、みんな、じっと座って先生の帰りを待っている。

数分後。

先生が帰ってこない。普通の事態じゃない、と思ったのか、何人かが「職員室に見に行こう！」と部屋を出てくる。十数人部屋を出て職員室に向かうが、途中で「やっぱり怖い」と足が止まってしまう子もいる。素直に。

職員室に来た子、数名。

「先生いない!？」

「いないよ」

「先生が、園長先生にバトンを返しに行くって言って、いなくなっちゃったの！」

「そうなの!?なんでそんなことを？」

「きっと怒ったんだよ、いつも負けてばかりだから！」

「そうなの?みんなが負けると先生は怒るの？」

「… ううん。そんなことない」

「じゃあ、なんで先生がいなくなったのかわからないと、どうしていいかわからないね。あおぐみのみんなまで話してみたら？」

あおぐみに帰っていく。

数分後。

あおぐみ全員が急に走って部屋から出てくる。年少年中、全部のフロアを探しはじめる。でも先生は見つからない。職員室に数名が来る。

「どうしたの？」

「…先生が、リレーやめようって言うの…」

Fの顔が、ぼくの眼前で、みるみる変化して、泣くのを、ぐっとこらえる顔になる。

「先生がどこにもいないの…！」

三人きょうだいの末っ子のFは、いつも笑って「ユウシ先生きらい♪」なんて言ってふざけてるところしか見たことがない。

こんなふうに関係を出すのを、初めて見る。

芦田愛菜の演技なんかよりはるかに本物の、圧倒的な感情。

まだまだ、10月。

ひとの思いに気づいたり、みんな話合う、そんな経験の、発達の、ほんの入口。こどもたちだけで、すべて解決することは、難しい。だから、保育者が、「援助」が必要だ。少し待って、クラスに行く。

ぼくがクラスについてきたとき、あおぐみは、じぶんたちで考えたのだろう、給食の仕度を始めていた。先生はいなくても、テーブルを出し、雑巾を出し、給食を運ぼうとしていた。そうだ、もう13時。いつもならとっくに給食の時間だ。

「先生が帰ってくる前に、準備しようと思って！」

未熟なこどもたちが考えた、「今できること」。

「ねえ、いまFちゃんたちに少し話を聞いたんだけど、よくわからない。どういうことなの?教えてくれる？」

給食の仕度をやめ、あおぐみが集まって、座る。みんな、本当は誰かの助けを待っていたのかもしれない。全員揃った前に、ぼくが座る。

威圧的には決してならないよう、話を聞く。

「いったいどうしたの？」

以降の話は、ぼくがこどもに問いかけて、こどもが答える。

ひとつひとつの間には、考える間が、あく。

「先生がね、リレーやめるって言うの！」

「そうだよ、みんなやりたいてって言うてるのに！」

「なのに先生は、みんなの走順を決めた名前の紙を、ゴミ箱に捨てて、作戦ノートもバトンも持ってどっかにいっちゃったんだ！」

「僕は何にも悪くないのに！」

「先生がいけないんだよ！」

口々に色々な子が、色々なことを言う。

「ねえ、今、Gくんが『僕は悪くない』って言って、Bちゃんが『先生がいけない』って言ったけど、そういうことなの？」

少しの間、みんなが真剣な顔で、考えている。ややたって、Hが言う。

「いや、みんなが悪いんだ」

「なんで？」

「…先生と、がんばるって決めて、行ったのに、砂を触ったり、ふざけたりしてた。D!おまえもだぞ！」

「それをいうなら、Hもだ！」

「みんなだ！」

「そうなの？」

何人もが、うなずく。

「だから、先生はリレーやめようって言ったんだ。出てっちゃったんだ」

みんな真剣そのものだ。それぞれ、発達に違いはある。

それでもみんな、それぞれ真剣で、それぞれ思いのある表情。

「みんなは、どうしたいの？」

「リレーやりたい！」

「やりたいの？」

「がんばりたい！」

「でもバトンもないよ」

「先生はいなくていいの？」

「ダメ！」

「先生を探そうよ！」

「探して、どうするの？」

…

「今までみんな、がんばってきたよね。作戦も考えて、作戦ノートを作ったし、走順も考えた。ともだち同士で教えあっこともしたし、意見もいっぱい出した。がんばったよね。いっぱいがんばった。」

じゃあ、先生は、どうだったんだろうね？」

「…先生も、がんばってた」

「いっしょ。いっしょの気持ちだった」

「じゃあ、いま出ていっちゃった先生は、どんな気持ちだったんだろう？」

長い、間。

「…悔しい気持ち？」

「…泣きたいような気持ち」

「先生が目、赤かった」

「すこし涙が見えた」

みんな、真剣に考えて、言葉にしていくな。

ひとりずつが少しずつ気づいたことを、みんなで思いにしていくな。

「先生は、そんな気持ちで出ていっちゃったのかな」

「先生を探そうよ」

「でもどこにもいないよ」

「でも探さなきゃ！」

「探して、どうするの？」

…

「謝りたい！」

「謝るって、どうして？」

「砂を触ったり、友達を見てなかったり、そういうことを謝りたい」

「そうだ、それを言いたい」

「そう… 謝って、それからどうするの？」

…

「これから、がんばるって、言う！」

すこしずつ。ほんのすこしずつ。みんなの思いがまじりあう。

まだ、「ひとりひとり」だった心が、「みんな」になっていく。

こう書いていても、全然書けている気がしない。あの空気感を、みんなの表情を、まるで表現できている気がしない。

感動とかじゃない。だけど、圧倒的な、「ほんとうの感情」を、間近に、真っ正面にうけて、その圧に、ぼくの心が揺さぶられるのがわかる。

大きな音楽を浴びた時のような、ピカソを見たときのような

中也や賢治の詩のような、「ほんとうの感情」に、本物に、

なぜかあられそうになる涙を、ぐっところえる。

「じゃあ、探そう。…むやみに探しても仕方ない。そうだ、放送しよう」

職員室のマイクの前で、みんなで声をそろえる。

「さきせんせい！あおぐみにきてください！」

あとは、先生を信じて、待つだけだ。

先生に今の気持ちを伝えられるように、きちんと座って、待つ。

数分後。

主任先生から事情を伝えられた担任が、部屋に戻ってくる。

みんなと向き合って座る。

5分はあった。

こどもと先生が、向き合って、少なくとも5分は、ずっと、お互い無言だった。

そのうち、Aが、口を開く。

「せーの！」「ごめんなさい！」

そこから、先生とあおぐみみんなの、話。これまでと、これからの話。

まだまだ、こども。まだまだ、わからない。

でも、経験している。ほんとうの心を。本物を。

リレーがどうなるかは、わからない。ただ、わかることがある。

この子たちは、大きくなる。

すこしずつ、ほんのすこしずつ。だけど、確かに。

ぼくは、そこに共にいることができる喜びを抱きしめて、一日を終わる。

ありがとう、そんな気持ちで。

明日、また石を拾おう。ぼくにできることは、そのくらいだ。

「blue revolution」 10月5日 記

彼らの走る姿を見ると、胸がギュッとなる。「表現として」という観点から

見れば、彼らの姿に勝るスポーツ選手は、プロにだってそういないだろう。

今日は運動会前の、最後の年長公式練習。

本番のグラウンドで3クラス揃って走る、本番前最後の機会。

こどもって1日で変わる。「革命」が起こる。

積み上げたものに、さらに革命が。

昨日と今日じゃ、まるで違う。違う顔だ。

もちろん全クラスが真剣勝負、全クラスが昨日より速い。

少しも手なんか抜いてない。

その中で、あおぐみ白チーム、2位。初の、2位！

「2位、あおぐみ！」

と発表したときの、全員立ち上がったの「バンザイ！！」

白チームだけじゃなく、赤チームも立ち上がって、満面の笑顔で叫ぶバンザイ！！

だって仲間だ、同じクラスの。

あきらめなければ。

なにが起こるかなんて、誰にもわからない。

決まりきった未来なんて、ほんのひとつもない。

幸も不幸も等しく、ただ未来は不測だ。

いくらそうなると予想できることも

決まりきったように見えることも

未来はすべて不測。

わかったような顔してるのは、

なんにもわかってない、いや、「忘れてしまった」、大人だけ。

確かに存在する時間は「今」だけで、こどもたちは「今」に生きている。

忘れていない。

あきらめなければ、なにが起こるか、誰にもわからない。

「あきらめなければ！」

その証拠を、今日、鳥肌を立てながら、ぼくは見た。

思い出そう。ぼくたち大人も。

昼、給食はあおぐみで一緒に食べた。

まるでボロボロの地図を信じて探した財宝のありかになり着いた海賊たちのように、テンションの上がりきったこどもたち。

部屋に入ったら服を脱がされそうになった。あやうくパンツまで脱がされるとこだった。酔ってんのか！

いや、酔っている。勝利という美酒。

全員嬉しそうで 普段おとなしい子もよくしゃべり

表情少なめな子もついついニコニコ

よーしみんな、いっぱい食って強くなろう、速くなろうぜ！

と給食を食いまくる。みんなおかわりしまくる。

煮物も、スープも、だいたい不人気な海藻サラダも、全部なくなった。

全部たいらげた。

遊んで、走って、食って、大きくなるんだ！

単純で、愛すべきこどもたち！

ところで、3位になったのは、みずいろぐみ。

ぼくは、スポーツはよくわからない。保育なら、少しだけわかる。

勝ってきたチームのほうが、難しいんだ。

いまあらためて、課題にぶち当たるみずいろぐみ。

(ぼくはベランダで盗み聞き)

部屋からこどもたちの声。

「おまえは真剣なのか！」

「がんばるって言うだけじゃわからん、同じことばかり言うな！」

「なにが足りないか考えろ！」

同じだ。

あおぐみもみずいろぐみもふじぐみも、いま、「みんな」で育ちあう。

カウントダウンは、2！あと、2日。

こどもって1日で変わる。「革命」が起こる。

今日と明日じゃ、まるで違う。



ほんとはきっと、大人も、変わるんだろう。  
人生に革命がいるのなら、必要な時間は、「今」、だけなんだろう。

## 「青色の向かう所」 10月7日 記

あおぐみ、足の病気が原因でしばらく休んでいたIが、運動会前日の今日、夕々に登園。ただし、少なくとも次に精密検査を行うまで、医者から「歩くのはいいが絶対に走ってはいけない」と厳重注意。

リレーに参加するなら、歩いて一周しなければならぬ。

それはつまり、今まで1位を目指してきたチームの、3位を確定させる、ということは、もちろんIにも、クラスの仲間にも、わかる。

では、勝つために、走れないIをリレーに出さないのか？

応援だけにさせるのか？

そして、Iの気持ちは？

Jの母が言う。

「最近ずっと、寝言でも、「がんばれ！がんばれ！」と半ば叫んでいます」  
そう、「勝ちたい！」という、切実で、必死で、夢にも見る本物の思い。

そして、Iが休んでいる間の練習で、「Iは走りたくても足が痛くて走れないんだぞ！」という声を何回も聞いた。

「ひとりだけでがんばる」のではなく、「みんなで力を合わせる」ことの大切さ、気持ちよさに少しずつ気づいてきた。

足が遅い子もいる。速い子もいる。

だけど、話し合い、ときにぶつかり、ケンカもして、そして全員がいま出せる全部の力を出し、合わせ、大切な大切な一本のバトンを、思いをつなぐこと、その強さに、充実に、仲間の存在に、気づいてきた、みんな。

「誰か欠けてもだめだ、みんなでやりたい！」という思いも、また本物。

いま話し合っている。Iも、みんなも、話し合っている。

運動会直前の、半日保育の短い時間に。

ぼくはベランダに座って聞いている。

誰も答えを準備していない。

だけどいまの君たちを信じているから

君たちで考えて、君たちが決めろ。

どうする、あおぐみ。

なにに向かって、走る？

## 「Heart of Gold」 10月7日 記

ニール・ヤングという人がむかし歌った、「Heart of Gold」という歌。  
こんな歌だ。

I want to live, I want to give  
I've been a miner for a heart of gold.  
It's these expressions I never give  
That keep me searching for a heart of gold  
And I'm getting old.

私は生きたい 私は捧げたい  
私はこれまでずっと 「黄金の心」を掘り当てようとする鉱夫だった  
口では言い表わせない様々な思いが 私に美しい心を探し求めさせ続ける  
そして私は年をとっていく

1時間45分。

今日は半日保育だ。

朝、全員が揃うのがおおよそ9時半、さようならが11時半。

そのうち1時間45分、あおぐみは話していた。  
先生によるIの病気や足の状態の説明から始まって…

Iが自分の気持ちを話し、それを受けてみんなが話す。

ほんとうにみんな、全員が、話す。

誰かの思いを受け、また誰かが話す。

1時間45分、集中力も切らさずに、真剣だった。

本番1日前。

話し合ったあとの黒板を、先生が消していなかったので、撮影した。



もう、ぼくたちは、なにも言うことはない。

よく、育った。ほんとうによく育った。

この運動会1日前に、もうはっきりとわかっている。

この運動会を通して、何を学び、育ててほしかったか

わたしたちの保育のねらいは、達成している。

ほんの2年前。毎日泥水につかっていたKが。誰でも叩いて、積み木をぶんなげていたLが。おとなしく目立たなかったMが。いつも何かに奮えていたNが。素直じゃなくていじわるだったOが。

たった一週間ちょっと前、予行のときは走れたI。

ずっと練習して速くなったI。

今は早歩きすら禁止されているIは、言った。

「足が痛くなって治らないのはいやだ、走れないなら、応援だけする」

それを受けて、みんなが言った。思いを。

歩くのはできるの？

じゃあ、歩けばいいよ

歩いたら負けちゃうだろ

負けたらくやしいよ

3位はいやだ

...

写真にあるとおりに。

負けたくない。勝ちたい。

でも 同じようにあられる、自然な思い

「Iもなかま」

Iがいなくてこまる

みんなってことは、Iもだ

そんな意見が自然にみんなの口からあられるたびに、険しい顔だったIが、だんだん笑顔になってくる。

そう、ほんとうは走りたいたんだ。

Iだって一緒にいたい

同じバトンを受け取りたい、渡したい

ほんとうは一緒にいたい、「一緒にやろう」って言ってほしい

言ってほしかったんだ。

「おれ、走る」とIが言う。

それはお医者さんが言うように、どうしたってできない

足だって痛いだろう

でも、Iはきっと、その言葉が口から出るのを止められなかった。

そうして 長い長い時間、話し合っ 普段意見を言わない子も

もちろんIも 全員、思いを口にして

そして最後に、全員一致で考え出した結論は

「Iも歩いてリレーに参加する 歩ける所までは自分で歩く  
Pと一緒に歩いて  
Iが歩けなくなったらPにバトンを渡し、続きを走ってもらう」

明日も1位を目指す。当たり前を目指す。  
みんなで、目指す。1位、「金」を目指す。

しかし、この子たちは、もう持っている。「黄金の心」を。

明日、バトンに満ちた黄金の心を、みんなで渡していく。

I want to live I want to give  
searching for a heart of gold  
And I'm getting old.

「2011年10月8日、快晴」 10月8日 記

運動会が終わった。

ぼくは自分の幼稚園の運動会が好きだ。  
こんなに素敵な運動会を、他に知らない。

見た目だけ親ウケだけ考えない。完成された姿を見せようとも思わない。  
猿まわしの芸みたいなのをこどもにやらせる気もない。  
ヤラセに何の意味がある？  
ただ本物のこどもの姿を、発達を、それだけを見せる。  
客のためのこどもじゃない。こどものための客だ。

年長、バトンタッチリレー

赤チーム

1位：ふじぐみ 2位：みずいろぐみ 3位：あおぐみ

白チーム

1位：ふじぐみ 2位：みずいろぐみ 3位：あおぐみ

今日、本番の結果が出た。  
1位から、3位まで。

「仲良し負けなしルールは みんなピリってこと」  
「ドキドキしてないゴールは ゴミ箱ってこと？」

(from 「メインジェット」 by ザ・クロマニオンズ 作詞・作曲：甲本ヒロト)

今日、夏と秋のあいだ、こどもたちがグラウンドを駆け抜けて行く。

バトンを渡し思いを渡した暑い暑い午前。

本番のリレー、最後のリレー、ドキドキしたゴールには、1位もあれば、ピリもある。

みんな1位になりたかった。  
本当に1位になりたかった。  
1位っていう結果が欲しかった。

たしかな結果があるから、  
勝ったことと負けたことがあるから  
そこをみんなで目指したから、  
「みんなピリ」じゃなかった。  
順位があって結果があるから、  
それを本気で目指したから、  
みんな1位のような「誇り」を…  
いやそれは本当に、「誇り」として1位なのだ。  
それを、その胸に持てたんだ。

「自分が好きだ。自分たちが好きだ」

見るものの胸にもそれを思い起こさせる。

勝ち組、負け組、そんな言葉は、本物を本気を知らない人間の言葉だ。

こどもたちが、ただ、暑い日に、走った。  
それが、誰にも、この世を一生懸命生きてやる、と思わせる。

「後日談」 10月20日 記

今日、あおぐみの描いた「運動会でリレーをしている自分」の絵を見た。  
ずっと遅くて、最下位続きだったあおぐみの絵。  
結果で言えば、本番も、最下位だったあおぐみの絵。



ぼくは鳥肌が立った。

配った紙よりでっかく描け、なんて言ってない。四ツ切の画用紙しか渡してない。刷毛で塗ったんじゃない。筆で描いた。自分で描いた。

足が、腕が、動いている。力強く。

そうだ、意識したんだから、がんばったんだから。

いっぱい前を出して、いっぱい振って、どんな顔で、バトンを持って、自分で自分が見れなくても、わかる。描ける。

自分がリレーをした、「確かにした」、ということに、思いが、充実感が、誇りがなければ、こんな絵になるはずがない。



※ちなみに、Hは、この絵を描くまで、絵が大の苦手だった。絵を上手に描くための表現手段を教えることより、「描きたいと思える経験をする」ことのほうが、ずっと大切。

「最下位」でゴールした、アンカーだすきをかけたH。

最下位を本気で走り抜けたHの絵。

肯定感が、愛が、あふれている。

「自分が好き」。

四ツ切なんかじゃ足りるはずない、大好きな自分を表現するのに。

これを見た保護者が「わたし、今までの人生で、ひとりでこんなに大きな絵、描いたことない」とつぶやいて、帰っていった。

驚きながら、嬉しそうに。